

現代青年の傷つけ合うことを回避する傾向についての研究

岡田 努

(金沢大学人文学類)

問題と目的

現代の青年の友人関係は、しだいに断片化し、希薄なものになってきているとしばしば論じられる。岡田(2007)は、円滑な関係を指向しながら自他を傷つけないように警戒する青年は、それによって他者から肯定的評価を受けることで自尊感情の低下を防いでいる可能性を示唆した。これに関して岡田(2008a 日本心理学会大会発表)では、「友人から心理的に傷つけられる恐れ」が「傷つけること」の回避を促進し、それが被受容感を低め被肯定感および自尊感情を促進することが見出された。しかしここで用いられた尺度は友人関係全体の現代的特徴を測る目的であったため「傷つける」「傷つけられる」ことを怖れる傾向については十分把握されていない。よって本研究では、傷つけ合うことを避ける傾向に関する尺度を再度作成し、自尊感情に至る関連を検討することを目的とする。

方法

調査対象者 北陸地方の高校生 234 名(男子 67 名, 女子 167 名 15~18 歳 平均 16.21 歳), 北陸, 東海および首都圏の4年制大学学生 227 名 (男子 103 名, 女子 124 名 18~25 歳 平均 20.07 歳)の合計 461 名。

尺度項目 1) 友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての尺度(以下「傷つけ尺度」と略称)

予備調査(岡田 2008b 日本パーソナリティ心理学会大会発表)において得られた友人関係において傷つけ合わないよう注意する点についての自由記述回答を元に 36 項目を作成した。

2) 併存的妥当性の確認のため柴橋(2004)のアサーションの心理的要因尺度より「配慮・熟慮」下位尺度 6 項目を同時に実施した。

岡田(2008a)の結果との比較・検証のため以下の尺度項目についても実施した。

3) 被受容感・被拒絶感尺度 杉山・坂本(2006)が作成した尺度項目から、被受容感 6 項目、被拒絶感 4 項目を用いた。

4) 自尊感情尺度 Rosenberg(1965), 山本・松井・山成(1982)訳から「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」を除いた 8 項目を用いた。

結果と考察

(1) 傷つけ尺度の分析

傷つけ尺度 36 項目について最尤法による因子分析とプロマックス回転を行った。パターン行列から単一の因子に因子負荷量.3 以上の項目を解釈した結果、「友だちからバカにされないように気をつける」など相手から傷つけられたり恥をかくことからの防衛を表す因子 9 項目、「自分の内面的なことは話さないようにする」「7 友だちの内面に踏み込まないようにする」などお互いの内面に立ち入らず距離をとった関わりを表す因子 7 項目、「自分が悪いと思ったらすぐにあやまる」「友だちの話をきちんと聞くようにする」など礼儀をわきまえた関係を表す因子 9 項目、「友だちの気分を害するようなことを言わないようにする」「友だちを傷つけないようにする」など相手を傷つけないよう気を遣う因子 8 項目が得られた。それぞれの因子に負荷量の高い項目の合成得点をもって下位尺度(「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」)を構成した。Cronbach の 係数は Table 1 の通りであり「礼儀」「傷つけ回避」が若干低いものの信頼性がほぼ確認された。また「配慮・熟慮」との相関は、「傷つけられ回避」で $r=.411$, 「距離確保」で $r=.198$, 「礼儀」で $r=.664$, 「傷つけ回避」で $r=.569$ (いずれも $<.01$)であった。「傷つけられ回避」「礼儀」「傷つけ回避」のように、互いに傷つけ合わないよう配慮する対人行動を示す下位尺度で高い相関関係を持つことから本下位尺度での併存的妥当性も確認された。

またこれらの項目に基づいて確認的因子分析を行ったところ、全体のデータで各観測変数から因子のパス係数は.3 以上(RMSEA=.70)となった。さらに、高校生、大学生の間で多母集団同時分析を行ったところ、パス係数を等置制約したモデルの方が AIC, BCC とともに低く、学校段階間で共通する因子構造であることが確認された(制約なし AIC=2580.247, BCC= 2653.314 制約モデルで AIC=2568.546, BCC=2631.523, RMSEA=.051)。

Table 1 傷つけ尺度の因子分析結果(パターン行列)

因子		1	2	3	4
項目/アルファ係数		.825	.825	.732	.758
28	友だちからバカにされないように気をつける	.750	.130	.023	-.124
19	友だちの前で恥をかかないように気をつける	.712	.081	-.047	-.056
20	友だちから傷つけられないようにふるまう	.648	.102	-.114	.067
15	友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける	.593	-.029	.072	.059
34	友だちからどう見られているか気にする	.571	-.065	-.065	.261
8	友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける	.465	-.046	.254	.203
39	会話の間(ま)があかないように気をつける	.374	.227	-.056	.084
36	メールにはすぐ返信をするようにする	.317	.000	.209	-.071
33	共通の話題をさがすようにする	.315	-.001	.044	.230
13	自分の内面的なことは話さないようにする	.010	.843	.161	-.073
26	自分のプライベートなことには踏み込まれないようにする	.116	.813	.081	-.171
38	自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.200	.719	-.001	-.089
32	友だちと適度な距離を置くようにする	-.093	.508	-.014	.164
7	友だちの内面に踏み込まないようにする	-.003	.492	.070	.233
(37	友だちとホンネで接するようにする 除外)	.070	-.465	.361	-.149
11	あたりさわりのない会話ですませる	.180	.403	-.088	.146
25	真剣な話を真面目に話さないようにする	.055	.390	-.245	.161
31	自分が悪いと思ったらすぐにあやまる	-.060	-.056	.597	-.044
14	友だちの話をきちんと聞くようにする	-.132	-.024	.579	.026
27	友だちの気持ちを察するようにする	.104	-.040	.472	-.028
16	約束をやぶらない	.069	-.066	.465	-.149
10	友だちの気持ちに気をつかう	.147	-.036	.445	.233
18	友だちにやさしくするよう心がける	.165	-.154	.441	.229
23	友だちの話をさえぎらないようにする	-.177	.290	.427	.154
40	場の空気を読んで会話する	.166	.156	.349	.117
4	友だちに心配をかけないように気をつける	.164	.145	.320	.080
3	友だちに自分の意見を押しつけないよう気をつける	-.186	.115	.281	.231
2	気に入らないことを言われても怒らないようにする	-.123	.092	-.032	.600
29	友だちの気分を害するようなことを言わないようにする	.152	-.036	.174	.514
1	友だちを傷つけないようにする	.105	-.164	.300	.442
42	友だちのいやな面を指摘するときは遠回しな言い方をする	.202	-.048	-.123	.438
41	友だちの欠点には触れないようにする	.078	.126	.032	.432
30	友だちと意見が対立しないよう気をつける	.239	.159	-.104	.431
35	いきすぎた冗談を言わないようにする	-.094	.204	.191	.386
21	友だちの言うことを否定しないようにする	.196	.090	-.038	.328
5	自分には興味のない話題をしていてもあいづちをうつようにする	.173	-.047	.166	.247
説明された分散の合計(回転後)		4.962	4.228	3.215	3.574

=3に補正

因子間相関

因子	2	3	4
1	.395	.162	.433
2		-.099	.177
3			.366

(2) 各変数の平均と標準偏差は Table 2の通りである。高校生と大学生の間での平均値についてのt検定を行った結果、傷つけられ回避と距離確保において $p < .01$ で高校生の方が高く、自尊感情については $p < .05$ で大学生の方が高かった。このことから、高校生の方が傷つけられることを恐れつつ距離を取った関係を持ち、結果自尊感情を低下させていることが示唆される。

Table 2 各変数の平均と標準偏差

		n	平均	SD	t
傷つけられ回避	高校生	233	29.837	6.221	4.259**
	大学生	226	27.358	6.246	高校 > 大学
距離確保	高校生	233	20.622	4.736	5.486**
	大学生	225	18.031	5.363	高校 > 大学
礼儀	高校生	231	34.255	4.595	.526
	大学生	226	34.469	4.073	
傷つけ回避	高校生	233	27.060	4.613	.931
	大学生	226	26.646	4.912	
自尊感情	高校生	232	23.707	5.502	2.368*
	大学生	224	24.991	6.074	高校 < 大学
被受容感	高校生	231	19.645	3.349	.432
	大学生	226	19.783	3.484	
被拒絶感	高校生	233	9.511	2.355	.207
	大学生	225	9.462	2.651	

(3)モデルの検証

次に得られた下位尺度をもとに、岡田(2008a)と同様のモデルについて共分散構造分析を行った(投入変数は合成得点を用いた)。その結果、Figure 1に示すように、岡田(2008a)と同様の傾向が見られた(RMSEA=.083 CFI=.969)。(傷つけ尺度の他の下位尺度を含んだモデルでは十分な適合度が得られなかった)。

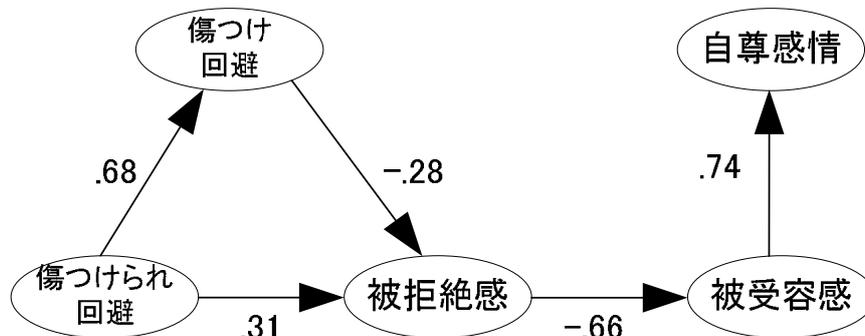


Figure 1 傷つけ合うことの回避から自尊感情へ至るモデル(値は標準化係数 すべて $p < .01$)

このことから、自分傷つけられることを恐れ回避することが、相手を傷つけないよう配慮的な行動を促し、それによって拒絶されず受容されているとして自尊感情が維持されること、一方傷つけられることを避ける傾向そのものは直接には被拒絶感を軽減しないことが再度確認された。

本研究は科学研究費 基盤(C)課題番号 20530589「現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究」の補助を受けて実施された研究の一部である。

引用文献

- 岡田努 (2008a). 現代青年の友人関係パターンと自尊感情 日本心理学会第 72 回大会発表論文集,40.
- 岡田努 (2008b). 現代青年の友人関係に関する試論 - 傷つけ合うことを避ける傾向について 日本パーソナリティ心理学会第 17 回大会発表論文集,208-209.
- Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究 52,12-23.
- 杉山崇・坂本信士(2006). 抑うつと対人関係要因の研究: 被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討 健康心理学研究 19,1-10
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30,64-68.